



情報を共有することが大切なのに縦割り組織が邪魔をしている

本はなぜデジタル後進国になったのでしょうか？
これは今に始まったことではなく、1990年代にパソコンが普及し、インターネットの時代になった当初から、日本はデジタル化の波に乗り切れていませんでした。18～19世紀の産業革命に匹敵するほど大きな変革だったにもかかわらず、この本質的な価値を正確につかんでいた人は多くはなかったのです。

企業や行政はデジタル化のためのシステムを導入しましたが、それまでの自分たちの仕事のスタイルを変えることはしませんでした。縦割り組織を維持したまま業務をデジタル化しても、ほとんど意味がありません。デジタル化

においては、情報を共有することに大きな価値があるからです。しかし、多くの場合、部署ごとに管理していた紙の情報が、そのままパソコンの中に移り、ブラックボックス化しただけに終わりました。

高度にデジタル化した現代社会では、一瞬の判断の遅れによってビジネスチャンスを失うことは日常茶飯事。そのため、縦割りや上意下達の旧来の組織をフラットで風通しの良い形へと変えていくことが求められます。裏を返すと、一人ひとりの判断や発想が試される時代になってきたのです。

「モノ」よりも「コト」の時代、見えない価値をデジタルで提供していく

「組織横断」という言葉がありますが、会社で働く人たちが、情報や知見、経験値を部署の壁を越えて共有すれば、全社的な課題や目標が見えやすくなります。より多くの人で考えればそこに多様性が生まれ、新しい発想も生まれやすくなります。紙ベースの情報と違い、デジタルの情報は日々更新され、最新のデータをもとに前例がないことを考えられます。そして、前例がないからこそ、とにかくやってみようというチャレンジ精神も生まれます。

日本の企業でDXによる組織・業務の変革が進まないのは、過去の成功体験を捨ててきていないからだと言わ

れています。かつて日本経済は自動車や家電などのモノづくりで成長してきましたが、今はモノをどんどんつくって、どんどん売る時代ではなくなりました。

「モノ」に代わる価値とは何でしょう？ それは「コト(体験)」だと言われています。例えば、美術や音楽を鑑賞したり、旅をしたりするのも「コト」ですし、医療や介護のサービスを受けるのも「コト」です。

そうした目に見えない価値をデジタルによって、スピーディに、フレキシブルに、そして多様性を持って提供しているのが、今、世界で大きく成長している会社です。

DXの本質的な価値とは何だろうか??

KEYWORDS

DXは単なる仕事の「デジタル化」ではなく、デジタルによって組織や業務のあり方を変える「変革」です。

具体的に何がどう変わるのか、キーとなる要素を挙げました。風通しが良く、動きが軽快なDX後の組織は、新しい発想が芽生える土壌となります。

DX前の企業・組織

DXで期待される変化

情報共有

情報のブラックボックス化



情報の見える化・共有化

組織の構造

縦割り組織



組織横断

企業風土

前例重視



最新データ重視

慎重な判断



スピーディな決断

失敗への恐れ



チャレンジ精神

提供価値

モノに価値



コト(体験)に価値